



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

中央公論社

世界の文学 50

©1965

グリーン
ダレル

訳者 田中西二郎
河野一郎

THE END OF THE AFFAIR
by Graham Greene
Copyright 1951 by Graham Greene,
Japanese language anthology rights
arranged through Laurence Pollinger
Ltd., London, and Charles E. Tuttle
Company Inc., Tokyo.

昭和40年9月1日初版印刷
昭和40年9月10日初版発行

価 430 円

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

グリーン

情事の終り

ダレル

黒い本

解説

年譜

3

209

454

484

情事の終り

C

に

人間の心には、いまだ存在せぬ幾つかの空席があつて、
それらの席を存在せしめんがために、苦悩がそこに坐りこ
むのである。

レオン・ブロー*

* ブローはフランスのカトリック作家（一八四六～一九一七）

第一部

一

およそ小説には始まりも終りもない。作者が随意にえらびだしたある瞬間の経験から彼は書きだす——そこからうしろをふりかえったり、そこからさきへと眼をやったりする、そうした瞬間を、わたしは「えらびだす」ものだとあえて言うのだが、それには実は職業作家として——かりそめにもまじめな意味でとりあげられる場合ですら——話術の技巧ばかり褒められてきた男の、あまり自慢にもならぬ自慢がひそんでいるのだ。だが、ところでわたしはいま、あの一九四六年の、暗い、雨に濡れた公園の一月の夜を、あのどしゃぶりの雨の広場を筋違いに横切ってくるヘンリ・マイルズの姿を、ほんとうにわたしの自由意志でえらびだすと言えるのか、それともあのときすでにそれらの心象のほうで逆にわたしをえらん

でしまったのではなかったか？ たしかに、ちようどあそこから書きはじめるのが好都合でもあり、わたしの手馴れた小説技法にもかなっているのだが、それにしても、もし当時のわたしが神を信ずる人間であつたら、あのとき一本の手がわたしの脇をとらえて、「声をかけろ、向うはまだお前に気がついていないぞ」とわたしをそそのかしたことをも、信じたかもしれないのである。

またさもないければ、なんでわたしにヘンリに話しかけよう？ もし憎しみという言葉を、だれにしる人間との関係について使つても大げさすぎないとすれば、わたしはヘンリを憎んでいた——彼の妻のサラアをも同じくわたしは憎んでいた。そうしてまた彼の側でも、あの夜の出来事のとあまり日を経ないうちにわたしを憎むようになったはずで、同時に彼もまた折りにふれて自分の妻を憎み、さらに当時のわたしたちが幸いにもその存在を信じていなかった例のもう一つの存在をも憎むことがあったにちがいないのだ。そういうわけだから、これからわたしの書くこの手記は、愛の記録であるよりはるかに勝れて憎しみの記録なのであって、したがってわたしがヘンリとサラアにとって有利なことを少しでも書くようになるとすれば、わたしは信用されていいのである。

いわばわたしは偏見とたたかいながら書いている。わたしの憎しみの近似値を表現するよりはむしろ真実の近似値を採るといのが、わたしの作家としてのプライドからだ。

こんな晩に、外へ出ているヘンリを見かけるというのは、めずらしいことだった。彼は家でくつろぐことが好きな男だし、なんと言っても——少なくともわたしにはそう思えた——彼にはサラアというものがあつた。わたしにとつては、家庭の快適さなどというものは、場ちがいなところで、または役にも立たぬ時分に限つて思い浮かぶ、要もない思い出みないもので——つまり孤独な人間にとつては、不快こそ望ましいものなのだ。現にわたしがこの公園の南側の、つまり住宅地として好ましくない側に借りている、居間と寝室兼用のアパート、前の持主たちの思い出のからまつている家具にさえ、家庭的快適はありすぎるくらいだった。わたしは雨のなかを少し歩いて、酒場で一杯のんで来ようと思つた。狭い玄関はごたごたして、来客の帽子や外套がいつはいいだったの、わたしはうっかりしてだれか他人の雨傘を手にとつてしまつた——三階の男のところへ、客が集まつていたのだ。そうしてステインド・グラスの嵌まつたドアを開

めて出ると、一九四四年の爆撃でやられてからいまだに修理されていない石段を、足もとに気をつけながら降りて行つた。その爆撃のことは、わたしには忘れられない理由があるので、このがんじょうで醜惡なヴィクトリア朝式のステインド・グラスが、われわれの祖父たちもこうであつたかとはかり、あの衝撃に毅然として耐えたありさまも、よく憶えているのである。

すぐに公園を横切りかけたわたしは、傘に洩るところがあつて、雨水が防水外套の襟の内側へ流れこむので、まちがえたことに気がついたが、ちょうどそのとき、わたしはヘンリの姿を見たのだ。彼を避けようと思えば、わけもなく避けられた。彼は傘なしだつたし、街燈の光で、雨のために眼が見えなくなっていることも、わたしにはわかつた。葉の落ちつくした黒い樹々は、少しも雨を避けるたよりにはならず、まるで壊れた下水管みたいに突立っているきりで、雨は、彼の硬い暗色の帽子の上に降りそそぎ、官吏らしい黒い外套を滝のように流れ落ちていた。よしんばわたしがまっすぐに彼のそばを通り過ぎたとしても、向うはわたしを認めなかつたらうし、舗道から二フィートわきへ寄りさえすれば、確実に彼の眼を避けることもできたはずなのだ、が、わたしは「お

お、ヘンリ、どうした、めずらしいねえ」と声をかけ、とたんにヘンリの瞳は、昔からの親友にでも会ったときのように明るくなった。

「おお、ベンドリクス」と、親しみをこめて彼は言ったが、世間から言わせれば、わたしではなく彼のほうにこそ、憎しみをもつ理由があるはずであった。

「この雨のなかを、なにをしてるんだね、ヘンリ？」世の中には、どうにもからかいたくてたまらない相手というものがある。こういう男たちには、からかうほうの人間の真似のできぬ美德が備わっているものだ。ヘンリは「なに、ちょっと外の空気を吸おうと思ってね」とはぐらかすように答えながら、急に横なぐりの風といっしょに吹きつけた雨のなかで、危く北のほうへ吹き飛ばされそうになった帽子を抑えた。

「サラアはどう？」訊かなければ妙に思われそうだから、わたしは訊いたが、実は彼女が病気で、不幸で、死にかけているとでも聞かされたら、こんな嬉しいことはないくらいだった。そのころのわたしは、よく想像をたくましくしたものだ——彼女がこうむるどんな苦しみでも、わたしの苦しみを軽くしてくれるだろう——わたしの陥っていたような下劣な境涯ではだれしも想像しがちなこ

とを、もう想像しなくてもすむはずだから。もしサラアが死んでくれたら、おれはこの気の毒な、馬鹿なヘンリのやつを好きになることさえできるだろう、とわたしは思った。

「ああサラアはね、今夜どこかへ出かけたよ」とヘンリが答え、とたんにまたわたしの心のなかでは例の悪魔が跳ねまわりだした。わたし以外の人間から同じことを訊かれて、ヘンリがきつと同じような返事をしたにちがいないかつての日——ところがサラアの居どころはわたし一人が知っていた——そうした日のことを思いだしたからだ。「一杯のむ？」とわたしが訊くと、驚いたことに彼はわたしと肩を並べて歩きだした。彼の家の外で、わたしと彼とがいっしょに酒を飲んだことは、まだ一度もなかった。

「きみはずいぶん長いこと、ぼくたちを訪ねてくれなかったねえ、ベンドリクス」——どういうわけか、わたしという男は名字のほうでひとから呼ばれる——わたしの文学好きな両親のつけてくれたモリスという少し気障な名は、友人たちにかかわれるためばかりに名づけられたものでもなからうのに。

「ずいぶん久しぶりだ」

「はてな、たしか——一年以上になるね」

「一九四四年の六月だよ」とわたしは言った。

「そんなになるかな——なるほど、なるほど」馬鹿め、とわたしは思った、この馬鹿は、一年半も会わずにいたことを、なにひとつ変だと思わずにいる。公園のふたつの“側”に住んでいる彼とわたしとを隔てているのは、五百ヤードに足らぬ平らな草地にすぎない。せめて一度ぐらい、サラアに「ペンドリクスはどうしてるだろう？ ペンドリクスをうちへ呼ぼうじゃないか？」ぐらいのことを言う気にならなかったろうか、そのときの彼女の返事に、どこか……奇妙な、腑に落ちない、疑わしいところか、この男には感じられなかったのだろうか？ 池のなかへ落ちた一粒の石のように、わたしは完全にかからの前から姿を消してしまったのだ。そのときの波紋は、おそろく一週間ぐらい、サラアを落ちつかせなかったろう——それとも一ヵ月か……しかもヘンリの目隠しは、かたく結ばれたままだった。わたしはその目隠しのおかげで得をしたときでさえ、ほかの人間もまた得をするこ

とができるのだと思うと、それを憎んだものだ。

「サラアは映画へでも行ったの？」とわたしは訊いた。

「いや、映画へはほとんど行かない」

「前にはよく行ったね」

『ボンティフラクト・アームズ』は、いまだに紙の吹流しや紙製の鈴でクリスマスマスの飾りつけがしてあり、紫やオレンジの安手な、けばけばしいいろどりがそのまま残っていて、若い女あるじが客を小馬鹿にしたような顔で、ふくらんだ胸をカウンターに押しつけていた。

「きれいだな」ヘンリは、べつにきれいだと思ってもいないのにそう言いながら、ぼんやりと、いくらかきまりがわるそうに、帽子の掛け場所をさがして、あたりを見まわしていた。わたしは、酒場に似た場所で、この男が入ったことのあるところといえば、せいぜい役所の同僚といっしょに昼飯を食いに入るノーザンブランド・アヴニュの小料理屋ぐらいなものだな、という印象を受けた。

「なにを飲む？」

「ぼくはウィスキーでいいよ」

「ぼくだっていいがね、まあラムで我慢しておくんだな」

わたしたちは席について、盃さかずきをおもちゃにした。わたしはヘンリには話することがあったためしがない。もし一九三九年に、わたしがある高級官吏を主要人物とする小

説を書きはじめなかったら、わざわざヘンリともサラアとも懇意になろうとしたかどうか、疑問である。ヘンリ・ジェイムズは、あるときウォルター・ビザントと論争して、才能ある若い女性には、近衛歩兵について小説を書こうと思ったら、兵舎の食堂の窓の外を通して、内部を覗きこむだけで足りる、と言ったが、わたしに言わせれば、彼女の小説があるところまで進んだら、細部について確かめるだけのためにでも、近衛士官の一人といっしょに寝てみる必要を感じるはずである。わたしはまさかヘンリといっしょには寝なかったが、改善の方法をとった。つまりはじめてサラアを晚餐に連れだした夜、わたしは官吏の妻の知識を手がかるに小説の材料に利用してやろうという冷血な意図を抱いたのだ。彼女のほうでは、わたしの下ごころを知らなかった。わたしがほんとうに彼女の家庭生活に興味をもっていると思つたにちがひなく、最初はおそらくそのことによって、わたしを好もしく思ひはじめたらしいのだ。ヘンリ君は何時ごろに朝食を食べますか？ 役所へは地下鉄で通うのですか、それともバスかタクシで？ 夜、うちへ仕事を持ち帰ることがありますか？ 王室の紋章入りの書類を持っていますか？——次から次へ、わたしは訊ねた。わたしとサラア

との友情は、わたしのこうした興味をもとにして花咲いた。ヘンリのことに、こんなにも本気で関心を寄せる人間があるということが、なにより彼女には嬉しかったのだ。ヘンリはいわゆるおえらがたで、といっても、えらいのは彼の役所が大きいためにえらいので、象がえらいのたいたいた変りはない。えらさにもいろいろあつて、どうひいき目にみても真面目にうけとれないものもあるのだ。で、ヘンリは年金省のえらい局長だった——後には国内保安省と名が変わつた。Ministry of Home Security——家内安全省かね、などとわたしは後に、よくそれをいやがらせの種にして笑つたものだ……だけれども、眼のまへの相手が憎らしくてたまらず、なんでもいいから相手をやつつけるための武器がほしくなることがある、そんな気持のときにだ。やがて、ある時機が来て、わたしはわざとサラアに、実はヘンリをとりあげたのは、小説のモデルに使うためにすぎなかった——それもわたしの小説のなかの滑稽な、喜劇的な役割をつとめる人物のモデルだ——と話して聞かせた。サラアがわたしの小説を嫌うようになったのは、それからだった。彼女はヘンリには途方もなく忠実だった（それだけはわたしも否定できなかった）から、悪鬼がわたしの頭を自由にあやつ

って、罪もないヘンリをまで恨めしく思うような濁った
気持のときには、わたしは、例の小説をだしに使って、
書くにたえぬような野卑な挿話を考へだして、サラアに
話したりした。……一度、サラアがわたしと一晚、ずつ
といっしょに過ごしたことがあって（ちょうど作家が自
作の小説の最後の一語に早くたどりつきたいと希うよう
に、わたしはその一夜に期待をかけていたのだったが）、
数時間というもの、水も洩らさぬ恋のよろこびにひたり
つづけたとさえ思えたほどだったのに、わたしはその気
分をぶちこわす不用意な言葉を口走って、せつかくの逢
びをいっぺんにだいなしにしてしまった。わたしは二時
ごろ不機嫌に眠りに落ち、三時に目を覚まして、サラア
の腕に手をかけてゆり起こした。そのときわたしはたし
かに、もうすっかり気持よく仲直りをするつもりだった
ようで、それでわたしの犠牲者もとうとう心からわたし
を信じて、眠気のためにうっとりとした美しい顔をこち
らへ向けた。彼女はもうさっきの喧嘩を忘れていた。そ
の忘れっぽさにさえ、わたしはまた一つ文句をつけたく
なった。われわれ人間のなんというひねくれた根性か、
それだのにわれわれは神によって造られたなどとうぬぼ
れている——もっともわたしには、空気のように透明な、

完方程式のように単純な神でなくては、頭に描くことは
困難である。わたしは彼女に言った、「さっきから目を
覚まして第五章のことを考へてたんだがね。ヘンリは重
要な会議の前に、呼吸がくさくなるのを防ぐためにコー
ヒーの豆を食べるかしら？」彼女は首を振って、声を立
てずに泣きだし、わたしはもちろん、なんで泣くのかわ
からぬふりをした——だってなんでもない質問じゃない
か、ぼくはぼくの作中人物のことで苦労していたのだ、
なにもヘンリをやつつけることにはならない、上流の人
たちがコーヒーの豆を食うことはめづらしくないよ……
そんなふうにならぬわたしはしゃべりつづけた。彼女はしばら
く泣いてから泣き寝入りに寝入ってしまった——よく眠
る女で、その眠れる精神力の強さまでがわたしにはもう
一つよけいな癪の種だった。

ヘンリはたちまち一杯のラムを飲みほして、紫とオレ
ンジの吹流しのあいだにみじめに視線をさまよわせてい
た。わたしは訊いた、「クリスマスは楽しかった？」

「うん、よかった。とてもよかった」

「自家でかね？」このわたしの語調に、なにか妙なもの
を感じたのか、ヘンリは顔をあげてわたしを見た。

「うち？ ああ、もちろんそうさ」

「で、サラアは元氣？」

「うむ」

「もう一杯ラムを取ろうか？」

「今度はぼくの番だ」

ヘンリが飲みものを取りに行っている暇に、わたしは手洗へ行った。壁に落書きがしてある——「この亭主は氣にくわん、女房のおっぱいも氣にくわん」「すべてのほん引き諸君とバン助諸嬢に。クリスマスの愉しき穢毒と新年のめでたき淋病とを！」。わたしは大急ぎでそこを出て、晴れやかな紙の吹流しと軽やかなグラスの音との世界へ引き返した。ときどきわたしは、他人のうちにあまりにも自分にそっくりなものを発見してみじめな氣持になり、とたんに聖人や高德の存在を信じたいという希いで胸がいっぱいになるのだ。

わたしはいま見て来た二つの文句をヘンリに聞かせてやった。彼をおどかしてやろうと思ったのだが、ヘンリがあつさりと「嫉妬しとつていやらしいものだね」と言ったのでわたしのほうが驚いた。

「女房のおっぱいってやつのことかね？」

「両方ともさ。人間は不幸になると、他人の幸福が羨ましくなるんだよ」こんなことを国内保安省でこの男が学

んでいるようとは、わたしは夢にも思わなかった。と、こ
う書いただけで——地口の「家内安全省」を思いだすだ
けでも——わたしのペンの先から意地わるさが滴り落ち
るではないか。しかもこの意地わるさのやりきれぬ生彩
のなさ、鈍味さはどうだ？ ああ、もしもわたしが愛を
こめて書くことができたなら——だがもしわたしが愛を
こめて書くことができたとなれば、わたしは別人になっ
ているわけだし、愛を失うようなことにもならなかった
であろう。とはいえ、その酒場のタイル張りの光ってい
るテーブル越しに、急にわたしはなにか温かなものを感
じた——もちろん愛などという極端なものとはちがって、
それはおそらく不幸をともししているという共感以上の
ものではなかったと思うが。わたしはヘンリに言った、
「きみが不幸だともいふのかい？」

「ベンドリクス、ぼくは悩んでいるよ」

「ぼくに話さないか」

彼が話す氣になったのは、たぶんラムのせいだったと
思うのだが、それともひょっとしたら、わたしが彼につ
いていろいろと知っていることに、いくぶんなりと彼は
氣づいていたのだろうか？ サラアは彼に忠実ではあつ
たが、あのころのわたしとサラアとのような間柄では、

一つや二つのことに気づかずにはられないのは当たり前だった。……わたしのからだの痣を見て、サラアが思ひ出したので、わたしは彼の臍の左のところに黒子のあることを知っていた。彼は近視だが他人の前では眼鏡をかけないことを、わたしは知っていた（そしてわたしはいまだに彼が眼鏡をかけたところを見たことがないほど、他人“なのである”）。わたしは彼の十時にお茶を飲む癖も知っていたし、彼の睡眠についての習慣までも知っていた。すでにこれだけたくさんを知っているわたしのだから、さらにもう一つの事実を知られてもわれわれの關係に変化が生じるわけではないと、彼は意識していたのだろうか？ 彼は言った、「ぼくはサラアのこととで悩んでるんだよ、ペンドリクス」

酒場の入口が開いたので、ざんざ降り雨脚が燈火のなかに見えた。小柄な酔漢が一人、景気よくとびこんで来て、「やあどうだ、みんな」とどなったが、だれも返事しなかった。

「サラアはぐあいでもわるいの？ さっきのきみの話では……」

「いや。病気じゃない。ぼくはそう思っていない」彼は悲しそうな顔つきで、あたりを見まわした——ここは彼の

なじめる場所ではないのだ。わたしは、彼の眼が血走っていることに気がついた。きつと眼鏡をかけ足りないせいなのだろう——世間はいつも他人だらけだ——それともあれは眼を泣きはらしているのだったろうか。彼は言った、「ねえ、ペンドリクス、ぼくはここでは話せないよ」まるで以前はほかのどこかでよく打明け話をしつけてでもいたような口ぶりだった。「自家へ来てくれないか」

「サラアが帰って来やしないか？」

「いや、大丈夫だと思う」

わたしが勘定を払ったが、これがまたヘンリの心の乱れていることを示す兆候の一つだった——彼は他人のもてなしを気軽に受けることのできない男なのだ。いっしょにタクシに乗っても、われわれほかの者が錢を取りだそうとしてまごついてる暇に、ちゃんと掌に車賃を握りしめているような男だ。公園の通りはまだどしや降りだったが、ヘンリの家は遠くなかった。彼はアン女王朝風の扇形の軒燈の下でラッチ鍵を使ってなかへ入り、「サラア、サラア」と呼んだ。それへの返事こそわたしの待ちこがれるもので、わたしの怖れるのもその返事だった、が、答えはなかった。ヘンリが言った、「まだ帰